

国際社会における文化交流活動は必要だと思いますか？

水鳥 真美

彬子女王殿下，日本学生支援機構遠藤理事長様，学習院大学井上学長様，ご列席の皆様，セインズベリー日本藝術研究所統括役所長の水鳥真美でございます。今日は，国際シンポジウム「世界の中の日本美術—過去から未来へ—」でお話しする機会をいただき，ありがとうございます。私は，本日登壇される皆様方と異なり，学者ではありません。また，もはや若輩とは言えない年になってしまいましたが，そうかといって文化人であると自称するほどの経験もございません。それでも過去5年，日本の文化・芸術について英国から研究し，発信する組織を運営してきた中で，本日のシンポジウムの課題である「日本の美術が国際社会でいかなる需要の文脈を形成しているのか」，について私が日頃から考えていることを皆様と共有し，本日の議論に貢献させていただければ光栄です。

私は，現在の仕事に就く前は，先ほどご紹介にありましたように外務省に勤めておりました。2000年代前半は在日米軍基地の問題，イラク制裁に関する国連安保理決議の議論，その後のイラク侵攻への日本の支持，そして，イラク戦争後にイラクの復興支援のために自衛隊を海外に派遣するといった仕事をしておりました。いわゆるハードパワーの分野の仕事でした。そして，2010年に外務省を退職し，今の立場で度々，日本に出張しました。当時の文化庁長官は，近藤誠一様という外務省出身の方でした。私が，近藤長官のところに挨拶に伺った際の非常に恥ずかしいエピソードをご紹介します。私から近藤長官に，日本の文化に関する事業をしているので是非支援してくださいとお願いしました。近藤長官は，快諾して下さったのですが，私が辞去する時に，「君はたしか外務省にいた時に，文化交流事業に人と予算を割く余裕は外務省にはない，その分を安全保障分野に振り向けるべきだと言っていたね。」と苦笑いしながらおっしゃいました。実に語るに落ちるとはこのことだな，と感じたことを恥を忍んでご紹介します。

あえて，その時の私の心境を釈明すれば，当時は沖縄の米軍基地に絡む様々な問題，或いは，イラクの復興支援，北朝鮮の核実験への対応といった仕事を私の実感からするとか

なり限られた人数のチームでこなすことに追われておりました。従って、文化交流事業の必要性を正面から否定しようとは全く思っておりませんでした。政府全体がやるべきことの中で言えば、重要ではあるがどこかの組織がやれば良いこと、つまり、必ずしも外務省の事業の中で優先順位の高い仕事ではない、そう思っておりました。このように国際的な文化交流事業は大事だけれども、自分でなくても誰かがやれば良い、誰かがお金を出せば良い、そのような考え方は、実は多くの方によって共有されているのではないかと思います。

時計の針を少し戻し、話を私の経歴と文化の関係に戻しますと、2005年に安全保障の仕事から一気にギアチェンジして、在ロンドン日本国大使館の広報文化センター所長に就任しました。この仕事は日本の文化、日本学、日英間の文化交流、知的交流を支援するセンターで非常に楽しい日々でございました。同時に私にとっては、日本から外に出て文化の仕事に携わったことにより、初めてと言ったら少し大げさですが、日本文化を誇りに思い、それを多くの方と共有することを喜びとする毎日でした。恐らくこういった思いは、日本人、特に海外に住んでいる方の中で多く共有されていると思います。

そして、この時に気付いたことがございます。当たり前のことではないかと思われるかもしれませんが、海外で日本の文化、日本学の研究の普及・啓発に努めておられる方の大半は現地の方だということです。もちろん、それらの方々は日本の政府、企業、個人の方々からの支援を得ながら、また、日本からイギリスにやってこられる研究者、文化人、芸能人の方と協力しながら仕事をしております。けれども、中心的な担い手は、英国であれば英国の組織、英国の個人であることを日々、実感しました。私どもの研究所も先ほど申し上げましたように、使命は日本の文化の発信、普及ですが、組織の国籍は英国です。職員には、イギリス人もいれば日本人もいる、アメリカから来た人もいるといった混成部隊です。そして、私は現在、本職のほかに日本協会、大和日英基金という、これもイギリスの組織として、前者は125年間、後者は25年以上、運営されている組織の理事も務めております。理事長は歴代全員イギリスの方で、イギリス人により活動が推進されております。こういった状況に鑑みれば、国際交流を推進するためには、日本の政府、企業、個人が海外における日本の応援団作りをすることは不可欠だということは明らかです。さらには、日本からの財政的な支援がなければ、なかなかこういった事業が成り立っていかないということも、これまた現実でございます。

そして、支援する際に何が重要かということですが、時として、我々は、日本文化の固有性というものを強調しすぎるといったことはないでしょうか。それから、海外における日本の文化に対する理解を深めようとしているにもかかわらず、結局、日本文化の本質は日

本人にしか分からない、といったように思ってしまうことはないでしょうか。さらに言えば、日本の中で行き渡っている、安心感がある一方でステレオタイプにもなりがちな日本文化に対する考え方を普及させることに熱心になりすぎる。そして、日本文化に対する建設的批判が海外からあった場合に抵抗感を感じる、といったようなこともあるのではないのでしょうか。しかし、それではそもそも海外で日本文化に関する展覧会を実施したり、パフォーマンスを紹介したりする必要はないかもしれません。近年、日本でも強調されるようになった多様性、ダイバーシティーは、国際交流においても重要です。日本の文化に対する多様な見方が提示され、議論が行われ、その結果、新しい解釈、新しいブームが生まれる。こういったプロセスこそが文化の発展だと思います。本日の日本の美術が国際社会でいかなる受容の文脈を形成しているのか、というテーマもまさにこのようなプロセスのあり方を追求していると感じます。交流というのは文字があらわす通り、交わって流れる動きです。双方向であることによって意義を持ちます。そこが広報事業との大きな違いです。

ここで海外発の日本文化をめぐる事象がひるがえって日本にインパクトを与えた例を2つご紹介したいと思います。一つは、皆様もご存じかと思いますが、現在、伊藤若冲という江戸時代の市井の画家が大人気を博しております。2016年も東京都美術館で大きな展覧会が実施されたと聞いております。若冲人気の原動力になった方の中には勿論日本の方もいらっしゃいますが、立て役者の一人はジョー・プライスさんという米国人です。ジョーおよび悦子・プライスご夫妻はジョーさんが若い時にニューヨークのギャラリーで買った、しかも若冲の作品とは知らずに本当に自分が好きだから買い、後に若冲作品と判明した作品からコレクションを築き始められました。そして、2006年にジョー・プライス、悦子・プライスご夫妻のコレクションが東京国立博物館で展示され、これが現在の爆発的な若冲人気のきっかけになりました。2013年にはプライス夫妻は未だ大震災からの復興途上にある東北3県の美術館に、ご自分のコレクションを貸し出され、「若冲が来てくれました」という展覧会が実施されました。私は、福島県立美術館でプライス様ご夫妻とお会いする機会を得たのですが、その時、ジョー・プライスさんがおっしゃるには、日本の方は美術品を買う際にどうしても落款、印章を見てこれは誰の作品かということから始まる。自分は落款、印章は読めないで自分の好きなものを買う。そこが自分のコレクションの始まりだとおっしゃっていました。

今、一つの例として数年前に大英博物館で行われた春画展についてお話したいと思います。春画はアートなのか、ポルノなのか。これについては、いろいろな議論、考え方があるといことは承知しております。しかし、大事なことは、春画という日本の美術、文化

を研究し、それを大英博物館という世界的な文化の殿堂で展覧会を行うために、非常に高額な助成金をイギリスの学術助成団体であり、イギリスとオランダに本拠を置く多国籍企業ユニリーバの創設者に絡むリーバー・ヒューム財団が出し、三年間に及ぶ研究をした結果、学術的にも非常に意義の高いカタログが出版され、展覧会に及んだことです。これは、まさに海外だからこそ、できたことではないかと思います。その展覧会が始まった時に日本の中でもいろんな議論がありましたが、その後、この展覧会は日本にも里帰りしてまいりまして、日本の中で、さらに春画についての議論が現在進行しています。これこそが文化形成の過程ではないかと思います。三たび、自分のことに戻って恐縮ですが、2008年に先ほど申し上げたロンドンでの楽しい仕事を終えて、外務本省に戻り命ぜられた仕事は、どちらかというともあまり楽しくない会計課長というポストでございました。なぜ、楽しくなかったかという、当時、民主党政権ができて、ご記憶にあるかもしれませんが、事業仕分けという、予算を削減するためのプロセスに関わりました。無駄削減という目的との関係でこのプロセスがどのくらい効果をあげたか、それはともかくとしまして、本日申し上げたいのは、外務省予算の中で、特に目をつけられたのが国際交流基金、国際問題研究所、国内および海外における広報政策という本日の話と関連の深い項目だったということです。しかしながら、当時ですら国際交流基金の事業規模を国民一人当たりで見ただけの場合、ドイツのゲーテ・インスティトゥートの4分の1、イギリスのプリティッシュ・カウンシルの13分の1という水準でした。それにもかかわらず、無駄であるということで、国際交流基金が当時1千億円の基金を持っており、だからこそ国際交流基金という名称を付与されているわけですが、そのうちの350億円を「埋蔵金」として、国庫に返納することになりました。国家財政建て直しという文脈で果たして、350億円がどれほどの意味があるのか。ちりも積もれば山になるとは言いますが、私はつまるところ、この成り行きは国際交流基金の使命に対する、時の政権の支持、さらに言えば国民の支持の欠如を示していると思います。ちなみに、このとき文化庁の予算もかなり削減されました。

ただ、文化政策、文化交流に対する予算が非常に少なくなっているというのは、世界的な事象でございます。英国でも2010年に保守党と自民党の連立政権ができて以来、財政再建が最も大きな政策課題になり、文化関連予算も非常に厳しく切り込まれております。こういった状況の中に数年前に英国のデッチリー財団というところで、「Cultural diplomacy: does it work? 文化外交は効果があるのか」というテーマで会合が開催されました。デッチリー財団をご存知の方は多くないかもしれませんが、米英間でもっと緊密に協力していれば第二次大戦は防げたのではないかと、という問題意識から戦後作られた知的交流、ネットワ

ーキングの有識者によるフォーラムです。多くの場合、このフォーラムでは、政治、経済、安保に関する議論が行われますが、4年前に初めて文化外交が議論のテーマとして採択され、2泊3日にわたってイギリスのマナーハウスで寝泊まりをともにしながら、議論しました。その時の問題意識というのは、次のようなことです。すなわち、「世界中で排外主義、宗教、民族主義に根ざす対立が強まっている。今ほど文化交流を通じて、各国間で考え方、価値観、伝統についての違いと共通点に関する互いの認識を共有し、議論を活性化する必要が求められたことはない。

しかし、先進国を中心として経済状況の改善が進まない中で、文化外交、文化交流が停滞している。この現状は克服できるのか。それが課題でした。デッチィリー財団の各会合の後、財団の所長が個人的見解をウェブサイトに掲載するのでご関心のある方は、ぜひ見ていただきたいのですが、私なりに会合の雰囲気一言で要約すれば、参加者が皆、非常に大きな危機感が持っていたにもかかわらず、なかなかまい解決策が出なかった、ということです。文化はいざとなったら、無しで済ませることのできる奢侈品、ぜいたく品である。あるいは、文化外交、文化活動のインパクトは測定困難である。そういった議論に対して、答えを提示しなければ文化交流はなかなか進まないだろう、ということもみんな認識していたことは事実ですが、であれば、どうすればいいのかという、このところの答えは、大英博物館の館長以下、著名な方が大勢いらしたにもかかわらず出なかった、ということをご紹介したいと思います。

確かに、経済対策と異なって、国際交流・文化交流の成果を数値にあらわすことは容易ではありません。さらにいえば、時としては数年、数十年の時間差をもってしか成果が出ないということも言えると思います。あるいは安全保障と違って、今、そこに危機があるから対処しなくてはいけないという分野でないことも事実です。従って、取り組みは後回しになってしまうということが現実ではないでしょうか。私自身も今の研究所の仕事の中で、いろいろな方にご支援をお願いすることが非常に大きな部分を占めております。おかげさまで、17年間、日本の政府、日本の企業、日本の個人の方からの暖かいご支援をいただいて活動を続けておりますけれども、活動の幅が増えれば増えるほどファンドレージングもまた必要になってくるというのが現実でございます。プロジェクトのためではなくて、特に、固定費、すなわち人件費、あるいは家賃、そういったものはどうしても支出が必要になるのですが、この部分についてのファンドレージングは非常に難しいことを、やればやるほど感じるというのが率直なところです。

英国ではアメリカほどではありませんけれども、寄付文化がここ数十年でかなり進んでまいりました。我々の研究所の創設、その後の運営のために寄付してくださったセイズベリー

一族のように全国的にも有名な篤志家の一族もおられますが、それだけではなく、2011～12年に Charities Aid Foundation という組織が行った調査によりますと、16歳以上の人の内の55%が毎月平均10ポンド、当時の換算レートでいうと1800円寄付している、ということでした。これは結構な額だと思います。ただし、寄付先を分野別に見ると、上から医療研究、病院、子ども、動物、海外、宗教となっていて、芸術、文化への寄付は全体の1%のみでした。もちろん、文化の定義の一つとして、学問や芸術、あるいは宗教、道徳なども含めた精神的活動から生み出されるすべてのもの、といった定義もございますので、この広義の定義を使えば文化に対する寄付もかなり積み上がります。ただ、狭義のところの文化についてはなかなか苦戦しているという状況が英国でもございます。

日本では、どうでしょうか。2011年3月、3.11の大震災のあと、寄付に対する税額控除など、制度面での改善もあり、寄付文化は進んでいるというふうに言われますが、英米に比べるとまだまだではないか、という感触を持っております。特に、英米では文化、芸術、或いは学術分野で個人による寄付がなされると、それに対する謝意として建物、あるいはポストにその方の名前を冠するといったこともございますけれども、日本では最近、なかなかそういうことはないようです。戦前は、例えば東大の安田講堂、一橋の兼松講堂のように寄付して下さった方、組織の名前が付いている建物もございます。或いは実業家の方がご自分のコレクションを一般に公開するために、ブリヂストン美術館、出光美術館、根津美術館といったような美術館を作るといったこともございました。また、日本の経済状況が良かった頃は、企業も非常にCSRに熱心で、日本のみならず、海外の大学にも寄付を行いましたが、最近はその面で低調になっているというふうには現状認識いたしません。

そして私が強く感じていることは、こと文化については政府ではなくて、民間からの寄付が、実は非常に重要ではないかということです。なぜかといえば、文化と政治が結び付きすぎますと、例えば、世界遺産の認定のプロセス、こういったもの一つをとっても非常にやっかいなことになる、ということが言えるからです。ブリティッシュ・カウンシル、またそのモデルをとった日本の国際交流基金も、政府からの一定の距離、英語でいうと *arm's length*、腕一本分の一定の距離感をもったところで活動するということを旨としています。これは、政府と文化があまりにもつながってしまうことに対する危惧感があらわれている考え方だと思います。

この *arm's length* の考え方を打ち出したのは皆様もご存じのジョン・メイナード・ケインズというイギリスの経済学者です。ケインズは経済学者として有名ですが、文化分野でも色々な実績があります。戦後、アーツ・カウンシル、日本語に訳しますと、芸術評議会とい

うイギリス国内の芸術活動を支援する団体を作ったのもケインズです。なぜ、arm's lengthが重要かと言えば、ビジネスにおいては金を出せば口を出すことも当然ですが、文化、芸術に関していえば、活動の目的が自由な発想、多様な感性を育み、批判的な見解も尊重する事である以上文化、芸術に対する支援は、一定の距離を持って行うことが大事だということです。

最後に、文化交流、国際交流が存在しなければ何が起こるのか、ということについて私の意見を少し述べたいと思います。これは本日のテーマである「国際的な文化交流活動は必要なのか」という質問に対する答えにもつながります。先ほど申し上げたアーツカウンシルイングランドの現在の理事長である、ダレン・ヘンリーという人が、「The Arts Dividend: Why investment in culture pays（芸術の配当：なぜ文化への投資はもとがとれるのか）」という本を最近、書いております。この本の対象は先ほど申し上げた国内における文化政策ですが、ダレン・ヘンリーが挙げている7つの配当は、本日のテーマである国際交流にも当てはまると思うので、考え方を拝借して紹介したいと思います。この本の中で、文化への投資によって期待される配当として次の7つの項目が提示されています。

第1に、豊かで多様な創造性を世代を問わず育むこと。

第2に、子ども、若い世代を中心として、質の高い文化的教育を受ける機会を作ること。

第3に、英語では「フィールグッド」というふうに書かれておりますけれども、健やかな心身をもたらすこと。

第4に社会における革新、イノベーションを向上させること。

第5に地域社会における豊かな生活の場を形成すること。

第6に雇用創出なども含めた経済的利益を生むこと。

第7にレピュテーション、これは国であれば文化立国であるといった肯定的な評判を得ること。

こういったことが7つの配当として挙げられています。

この7つの配当の他に、国際交流の文脈でいえば、先ほどのデッチェリー財団の会合の問題意識の背景となった、世界中におけるさまざまな対立の制約の中で、文化を通じて価値観、考え方の共通性と同時に、相違についても認識を高めることが喫緊の課題ではないかと思います。今、残念なことに世界中で、皆様もご存じのように様々な痛ましい事件が発生しています。その背景をひと言では説明できませんが、こういった状況の中であるからこそ、文化交流、国際的な文化交流の意義を考えていくことが重要であると強く感じます。そういった

大きな文脈の中で国際的な交流を考えていくべきではないか、ということ結びとさせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。

(みずとり まみ セインズベリー日本藝術研究所統括役所長)